「突然死」を防ぐ最先端MRI検査

心臓の立体画像を、リアルに再現してくれるクリニックが登場した。
自覚症状のない心筋梗塞等の病気を予防できる、最先端技術だ

ジャーナリスト◉油井 富雄

ゆい・とみお／1953年福島県生まれ。『週刊現代』記者を経てフリー。医療、健康食品問題を冷静な目で取材。今秋、『浅田宗伯―現代に蘇る漢方医学界の巨星―』（医療タイムス社）を上梓

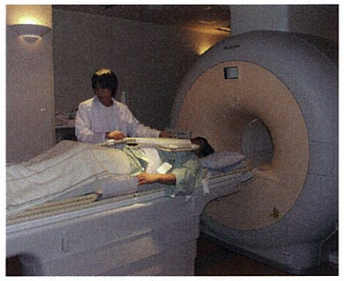
ちょっとした坂道を上っただけで、胸のあたりが息苦しい。最近、肩もパンパンに張る時もある。日ごろの運動不足と加齢のせいだと、気軽に考えていた……。ところが、同世代の仲間が健康診断で不整脈が発見されたり、動脈硬化が進み心臓バイパス手術を受けた、という話も聞く。

調べると胸苦しさ、息切れ、極度の肩こりは、心臓疾患の予兆の一つというではないか。病院の診察を受けるほど、症状は深刻ではない。とはいえ、心筋梗塞等が起きたら、命に直結する。そこで、心臓の診断に特化した画像診断クリニックの存在を知った。

日本初「心臓特化型検査医院」

JR総武線、地下鉄の各線が入り乱れる東京・飯田橋駅から徒歩数分の場所に、国内初の心臓特化型画像診断センター「心臓画像クリニック（CVIC）飯田橋」がある。

院長の寺島正浩医師は、アメリカ・スタンフォード大学の循環器内科のアカデミックスタッフとして七年半勤務した後、帰国して最先端の心臓診断技術を日本人の心臓病患者に生かすべく、昨年暮れに、このクリニックを開院した。



MRI検査を受ける筆者。緊張で血圧が高くなっていた

「ちょっと心臓が気になって大学病院に行っても、検査は二、三週間待ち、混んでいる場合は数カ月待ちというケースもあります。心臓病が発症して救急で運ばれれば、すぐ処置してもらえるでしょうが、それでは遅い場合もあるでしょう。自覚症状が気になった時点で、もっと身近に診察・検査できる施設が必要なのです」と寺島医師は話す。

「CVIC飯田橋」では、検査用医療機器の撮影技術に優れた専門スタッフを集め、国内屈指の鮮明な診断画像を実現している。画像が鮮明であるほど、心臓の冠動脈等の様子を微細に観察することができ、心筋梗塞等の予兆の発見につながる。検査時間は四十～六十分。問診や検査結果の報告を入れても、二時間あればすむ。

心臓に不安のあった筆者は、夕方の予約を取り、クリニックへ向かった。

自分の心臓がリアルに再現

検査の三時間前から、固形物やカフェイン含有の飲み物は控えなければいけない。クリニックでは、まず問診表に病歴等を記入して、看護師との面談のあと、医師の問診がある。

心臓の検査にはCT（コンピュータ画像診断装置）検査、MRI（磁気共鳴画像診断装置）検査、心エコー（超音波）検査があるが、今回筆者が受けたのはMRIだ。MRIとは、強力な磁気によって人体各部の断層画像を撮る検査だ。

寺島医師は「冠動脈の状態を見るのであれば、CTの方がいいでしょう。ただ、CTはエックス線を放射しますし、検査時に使う造影剤は、病人に用いた場合、数十万人に一人が亡くなるという報告があります。大騒ぎするほどのリスクではないかもしれませんが、アメリカの病院では、健康診断にはMRIを用いるのが主流。そこで当院では、MRIをお勧めしています。MRIは心臓の動きを把握する能力に優れており、心筋梗塞の予兆や、心臓血管の血栓の有無等がわかります。MRI検査でも造影剤を使う場合がありますが、当院では健康診断の場合は、使わない方針です」と解説する。

検査着に着替え、一通りの問診、聴診器による診断を終えた。筆者は少し脈拍が高かったようだ。初めての検査を前に緊張したためだろう。脈拍を整えるための錠剤を飲んだ。

検査室に入ると、まず心臓付近に、心電図を測定する機器を付ける。マイク付きのヘッドフォンを耳に付け、装置の仰臥台に位置し、円筒の中に入って行った。

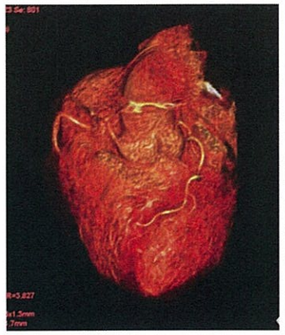
別室の検査室で待機する放射線技師とはマイクを通じ会話して、ナースコールも右手に握った状態。技師から「ハイ、息を吸って、止めて、ハイ、吐いてください」との指示がある。約五秒～十五秒ほどの息を止める行為を、複数回繰り返した。

こうしている間に、MRIは角度、位置を微妙に変えながら、一・七㎜ごとの心臓断面図を、百五十枚収集する。約三十分で検査は終わった。

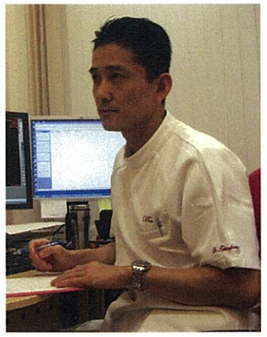
さて、着替えを終え、しばらく休憩して診察室に入った。検査結果は三十分～一時間で出る。医師が見せるコンピュータの画面には、筆者の心臓画像が映し出された。手のひらより少し大きい心臓画像に、冠状動脈の太さ、心臓各部に分かれる血管の様子が、一目瞭然に映っている。

さらに、コンピュータ上の操作で、心臓を様々な角度から見ることができる。別の画面では、脈打つ動きまでも再現される。こうして画像で確認できるのは「様々な角度からのデータを集積して立体的に構成できるからです。心臓の下部からの観察も可能で、心臓各部の血管の様子がわかります」（寺島医師）ということだ。あたかも解剖して心臓を取り出して、文字通り手に取るように、細部にわたって観察することができる。

さて、肝心の心臓の血管の様子についてだが、「現在のところ、医療上の問題は認められません」ということで、一安心。息切れや肩こりは、心臓が原因ではないようだ。



MRIで撮影された筆者の心臓。様々な角度から心臓の状態を確認できる



診断画面を前に診察する寺島正浩医師

病院情報

「心臓画像クリニック飯田橋」

■連絡先／〇三―五―〇六―五九五六
■住所／東京都新宿区新小川町一―四 飯田橋リーブレックス・ビズ一階
■HP／http://cvicclinic.com/

「顎の痛み」も心臓病の予兆

寺島医師は、「心臓病の予兆は、いろいろな部分に表れます」という。胸の痛みや苦しさだけではない。「心臓病の死亡者の多いアメリカのデータでは、心筋梗塞で亡くなる方の半数は、それまで無症状だった方。つまり、最初に心臓部の苦しさを覚えた時に、半数が亡くなるのです。ですから予防が大切。顎の痛み、肩、頸部のこりや、息切れ等も、心疾患の予兆です」という。

同クリニックでは昨年暮れの開院以来、約一千九百例の心臓検査を行ってきた。これまでの症例で代表的な例を、簡単に紹介してもらおう。

「三十歳代の女性でした。顎の部分が痛み、歯科医に診てもらったけれど異常なし。しかし、階段を上る時に限って、痛みを感じるというので、心臓の異常を疑われて来院したのです。心疾患があると、心臓に負荷がかかった時に、放散痛と呼ばれる痛みが、心臓以外の部位に発することがあるのです。心臓のMRIを撮ると、血管に梗塞を発見したので、すぐに当院が提携する病院を紹介しました」（寺島医師）

また五十歳代の男性の例では「特に自覚症状がなく、心臓ドックを受けた方でした。この方は三本ある冠動脈の一本が完全に詰まっていて、提携先の東京大学附属病院をすぐに紹介して、バイパス手術を行っています。画像からは、いつ心筋梗塞になっても不思議でない状況でした」という例もある。

症状が出たら、死の危険がある心臓病。いかに未然に防ぐかが重要だ。聴診器や外部所見ではわからない、心臓の鮮明な立体的心臓画像診断の真骨頂は、こういう症例を見逃さず未然に防ぐことができるようになったことだ。

今回は心臓検査だったが、ここでは脳血管の検査も行っている。平日の夕方の診察はもちろん、日曜、祝日も可能というのも、働き盛りの人には嬉しい話だ。ちなみに、同クリニックでは心臓ドックの他、他院からの紹介検査も請け負っている。また、筆者のように保険診療による外来も受け付けている。

それにしても、自分の心臓の画像を見て、これまで、昼夜問わず、休みなく動いている心臓が、急に愛おしくなった。幸い異常は発見されなかったが、それだけでも大きな意味のある心臓ドックかもしれない。LT